

〒260-0031 千葉県千葉市中央区新千葉2-17-6
サンコート新千葉102号
E-mail:kidchiba@lily.ocn.ne.jp
TEL:043-301-7262 FAX:043-301-7263
発行責任者：特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター
2023年7月10日発行 第103号 1部100円 <https://chiba.gekijou.org/>



2023年度

「子ども家庭庁」「子ども基本法」スタートの年



令和5年4月1日、「子ども家庭庁」が設置され、全ての子どもに関する法律の基本となる「子ども基本法」が施行され、「子どもの権利条約」の理念が盛り込まれました。その上で、年齢で区切らずひとり一人の子どもに合わせた支援であること、年齢にあった子どもの声を聴く姿勢が大人には求められています。子どもを真ん中に、子どもが自信をもって生きられる社会になるよう期待します。

一方で令和4年の小中高校生の自殺者数が512人、過去最多という発表でした(厚生労働省)。令和3年度千葉県の児童相談所における虐待相談件数は11870件(千葉市を含む)、前年度から241件増と、現実の厳しさを突き付けられ、大人である私たちにできることを改めて考えさせられます。「チャイルドライン千葉」や「ママパパラインちば」には、生きることに不安を抱える声や、やり場のないイライラ感を訴える声に、傾聴ボランティアが寄り添いました。地域の団体と共に様々な活動でも子どもの声に耳を傾けてきました。「子ども真ん中社会」の実現に、私たちの役割もますます大きくなると思います。

3年に及ぶコロナ禍による制約が子どもの体験の機会と豊かな成長を妨げてきました。

子ども劇場千葉県センターでは、「あそびを止めない」「わくわくドキドキ体験を止めない」「子どもらしい表現の機会を止めない」と、コロナ禍でも中止することなく、工夫しながら子どもの体験の場を県内各地で実施し、共感の輪を広げました。

学校、病院、児童相談所、養護施設、放課後等デイサービス、乳児院、子育て支援センター、保育園、広場等150か所、笑顔あふれるコミュニケーションの場を実現しました。思いっきり遊んだ満足感、表現を互いに認め合うことで嬉しさや自己肯定感の向上につながっています。今後、行政の施策等で学校での授業に芸術体験を取り入れ、格差なく、すべての子どもたちに届くよう願っています。

アートを活用した、0歳〜2歳とその親を対象とした行政との連携による子育て支援事業は、芸術が子育て支援に有効であることを実証し、3年間毎年「提言」を作るに至りました。我が町の子育て支援を地域で担おうと、地域ネットワークで話し合いを始めた市も出てきました。人格形成の芽や、非認知能力を育む、0歳〜2歳の子育て支援は「質の向上」がどこの市町村でも課題になっています。

自治体の子ども施策にもアンテナを張って、地域の団体と連携し「芸術の公益性」を社会に発信し、コーディネートしていきます。 (理事長：宇野京子)

2023年度(第26年度) 通常総会終了

日にち：2023年6月8日(木)
時間：10時30分～12時00分
場所：千葉市民会館特別会議室2
出席者：正会員45名中45名出席(うち委任・書面表決10名)
すべての議案が全会一致で承認されました。
■2年間の事業の重点課題として、全ての事業に、子どもの権利条約の理念と子ども観を入れ込んでいくことが確認されています。

2023年度の事業計画

- 文化芸術を活用し、子ども自身の自己肯定感・非認知能力を獲得する活動
- ①文化庁受託令和5年度文化芸術による子供育成推進事業
 - *県内26校(予定)で実施する芸術家派遣事業
- ②子どもゆめ基金助成事業
 - *「病院や児童福祉施設の子どもが笑顔になるQOL向上あそびワークショップ体験」18か所
- ③子どもゆめ基金助成事業
 - *出前で届ける子どもあそびアート*交流体験 あそほ あそほ」5か所
- ④日本郵便年賀寄付金助成事業
 - *「コロナ禍で制限されてきた「コミュニケーション力を取り戻すための子ども遊び交流体験」15か所
- ⑤赤い羽根共同募金助成事業
 - *「0・1・2・3歳児が出会うはじめてのおしばい」乳児院3か所
- 文化芸術を活用し行政・地域連携の子育て支援活動
 - *2市他
- 子どもや養育者に寄り添い「傾聴」による当事者を支える活動
 - ①チャイルドライン千葉 ②ママパパラインちば
- ネットワーク事業
 - 子ども系NPO、行政、個人、こども人権ネットワークとの連携

子どもが「こども基本法」の真ん中にいる

「こども基本法」を知っていますか？

～今こそ 大人(親・家庭・学校・地域・行政)の意識を変えるとき！～



■子ども観を問い直す

子ども支援や子ども主体の学びを実現するためには
子どもへの大人のまなざし(子ども観)が重要！！

- 子どもの自主性や主体性は やりたいことの中でしか育たない
- 満たされれば満たされるほど、むしろ自立は早くなる。

信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部 本田秀夫

- 子どもは一つ一つ違うタネ。それぞれが違うタネだから同じ野菜ができないのは当然！！子どもどうしを比較してはいけない！！

萩原・ナバ・裕作 岐阜県立森林文化アカデミー 准教授

2023年4月1日から「こども基本法」が施行され、こども家庭庁が設立されました。これまで障がい者や女性の権利を守る基本法は、憲法の基に様々な制定されてきました。が、子どもの権利を守る基本法だけありませんでした。1994年に日本が子どもの権利条約を批准して以来、政府は新たな国内法は必要ないとしてきたからです。批准後30年を経過して、「こども基本法」が制定された意味は大きく、「こども家庭庁」への期待は高いものがあります。この機に、すべての大人が意識を変えるときは“今”だと、自戒も込めて、声を大きくして提唱したいと思います。

■こども基本法の理念と期待

- 1 こども基本法(令和5年4月1日から施行)の意味・・・子どもの権利初の国内法
- 2 権利を主張するなら義務を果たしてからにしろと、本当にそうなんですか？
・・・いえ違います。人権はすべての人が生まれながらにもっていて、義務を果たしてからなどというおかしなことはありません。
- 3 「こども」とは？・・・心身の発達の過程にある者をいう。

こども基本法は上位法 概念図

憲法
子どもの権利条約
こども基本法
内閣府 厚生労働省 文部科学省 法務省の各法律

子どもの権利に関する包括的法律であり、関係省庁の子ども政策に通底する基本原則(基本方針)を明記したものである

「こども」とは こども基本法 第2条(定義)

この法律において「こども」とは、心身の発達の過程にある者をいう。こども基本法では、18歳や20歳といった“年齢”で必要なサポートがなくならないよう、心と身体の成長の段階にある人を「こども」としています。一人ひとりを尊重し、一律に年齢で区切らない！！

■大人も子どもも自分らしく生きることができる場

- 1 子どもを学校に合わせるのではなく、子どもに合わせて学校をつくる
- 2 子ども心が開いている学校
- 3 教育から「子ども主体」の遊育へ
- 4 大人の生き方が問われる。大人が聴く耳をもつ。意見表明の尊重は子どもと大人の信頼関係をつくる。



目指すべき「こども真ん中」社会とは

「子どもの安心、自信、自由」が最優先される環境づくり
まず、子どもを幸福にしよう！すべてはそのあとに続く

- 子どもが安心して自分らしく過ごせるために必要なのは、立派な建物よりも信頼できる人間関係。
- 子どもと大人の関係が対等で公平であること。支援臭がしないこと。
- 子どもの権利(意見表明)を尊重する大人の存在。子どもを信じて待てる、任せることができる。
- 「子ども期」が大切にされる。思う存分楽しく、子どもらしく過ごせる。

■こども基本法は「子ども主体」の法体系・・・こども基本法により「子ども主体」の理念に基づく法体系によって、子どもの権利を価値観の軸とした議論と対応が可能となる。子ども主体の学校に(学校あっての子どもではなく子どもあっての学校)

当事者(子ども・養育者)の声を受け止める「傾聴ライン」から

「こども家庭庁」「こども基本法」のスタートに伴い、こどもや若者の意見を幅広く募り、政策や制度づくりに反映させる取り組み「こども若者★いけんぷらす」がはじまった。名称は「みんなのパートナー ぽんぽ」(※みんなのパートナー⇒みんな対等である ぽんぽ⇒ポンプのように意見を吸い上げる) 当団体では「チャイルドラインやママパパライン」を20年以上にわたり開設し、当事者の声を聴き受け止めてきた。これらは「こども家庭庁」の方針に添っている事業として、また、当事者の声が社会問題の解決につながることで、地域や家庭の暮らしの中に「聴く」をとり入れることを願いとしている。子どもにも子育てにも寛容でやさしい町になりますように…。



子どもの声を聴くリアル チャイルドライン/子どもたちの“今” かかえている辛さや不安に寄り添う

☎ゲームで大金を課金してしまい、依存症になってるかも。どうしたらやめられるか、どうしたら良い？

<良くないと分かっているけど長い時間続けてしまう辛い気持ちに寄り添いながら、やめるために何ができそうかを一緒に考えた。これならできると自ら答えを出せていた。お母さんに信頼してもらいたいなという思いも話してくれた。>

☎不登校になりかけた時、親と先生から不登校は悪と言われ、ずっと登校している。勉強についていけない、吐き気・めまい・頭痛・腹痛がひどい。不登校はダメなのかな。

<悪と言われたその気持ちを聴いて受け止めた。その辛さに寄り添い、不登校は悪ではないことを伝えた。「頑張って登校しているんだね。でも私はあなたの身体が心配なので、無理をしないで身体を大事にしてほしいと思うけれど」とメッセージを伝えた。>

☎父親が苦手で、どういう態度を取ったらいいかわからず怒らせてしまった。母は気をつかって間に入って来ていて迷惑かけている。自分がいなくなればいいと思うけど勇気がないから。死ねない。恐くて上手く話せなくなるけど、言ってみようかな…。

<泣きながら、絞り出すように家での様子や自分の存在について話してくれた。家族に気を使い気持ちが疲弊してしまっている辛さが痛いほど伝わってきた。掛けてのペースに合わせ、ゆっくり寄り添うと、父親への関わり方を自分で見つけたよう>

☎死にたくなる。心療内科に通っているが就職できるか将来が不安。医者も信用できない。周りは進学や就職を決めている。おいていかれるような気がする。

<先が見えず、自分がどうしてよいか分からない不安を抱えているが、親には迷惑かけたくないと考えている。「何もできない自分を責めることはないと思うよ。身体がそれを要求しているのだから」ということを伝えて、気持ちに寄り添った>

☎クラスでも部活でもいじられる。我慢はできるけど…。受験を向かえ先生からのプレッシャーで胃が痛くなる。受験のための課外授業に出ると、部活の仲間にはざわりと言われる。

<部活をやめなくてここまで頑張ってきたし、周囲の人には悩みを言いたくないと言い、勉強と部活を両立させようと、ひた向きに頑張ろうとしている。誰にも言えない気持ちを話すことで、少しでも気持ちが軽くなるなら、という思いで聴かせてもらった>

☎悩み聞いてもらっていいですか。弟がいて、バスケも勉強も弟の方がちゃんとできて、私はあまりできなくて…。負けてるっていうか、くやしいうか…。できないのは自分が悪い。比べられてる。くやしいうか…。

<消え入りそうな小さな声で、泣くのをこらえながら思いを話してくれた。できない自分が悪いと思っていることを受けとめた上で、比べられてどんな思いかを聞くと「くやしいうか」。あなたは悪くないと伝えると、泣き出してしまい「またかけていいですか」と電話が切れた。またかけてきてね。>

養育者の声を聴くリアル ママパパライン/ママ・パパの悩みや辛い気持ち、悲痛な訴えに寄り添う



☎イライラして子どもを怒鳴ることがある。子どもがかわいくなかった。イヤになった。嫌いになった。もうどうでもいい。

<ゆっくりお話を聴かせてくださいね。止まることなく話された。時折あいづちをはさんだだけが、投げやりになっている気持ちや感情を冷静に振り返ったり、気づきもあったようだ>

☎子育て中の孤立が辛い。子どもに手を上げてしまうことも。発達の遅れがあり個別養育を受けている。

<お辛かったですね。お子さんとの話を訴えるように話してくれた。頑張りを褒めるとほっとした声に変わってきた>

☎子どもがかんしゃくをおこす。動作が遅い。朝も学校ぎりぎり。私を苦しめる為にいるように思えてしまう。直接子どもに「これ以上私を苦しめないで」と言ってしまった。

<毎日のストレスで、子どもを傷つける言葉を思わず言ってしまった自分を悔いる気持ちを聴いた。否定しないで寄り添う>

☎とても疲れた、話を聴いてほしい。子どもがコロナにかかり10日間隔離、その後、一週間自分の自宅待機。あれやこれやで疲れて、先日全身じんましん、爪がはがれる、ストレスですよね。疲れしました。

<大変な経験をなさったんですね。ねぎらいの言葉をかけ、しんどさに寄り添った。話をしているうちにだんだん元気そうな声になった>

☎妻の気に召さない受け答えをすると激しい言葉が返ってくる。気分の上げ下げが大きい。何度言ってもあなたはわからないと言われた。私は離婚したくないし、家族仲良く暮らしていきたい。そのことを妻に伝えると「私をしばらくつけている」と返された。自分を押し殺して妻に気を使いながら会話するのがしんどい。どんな言い方が正しいのか分からなくなった。

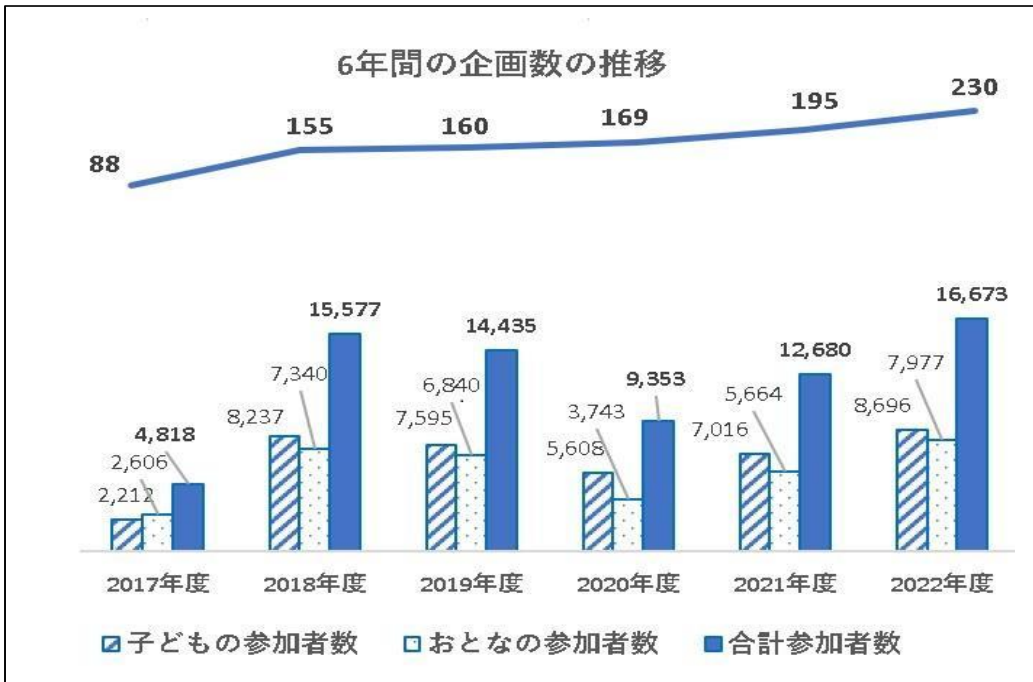
<やるせない気持ちが伝わってきて、「しんどいですね」と寄り添うと、奥様との関係で溜まった気持ちを吐き出してくれた>

聴いてもらって気持ちが楽になりました。パパ(男性)も相談できるママパパラインをWEB上で知りました。

6年間の「舞台鑑賞・芸術体験ワークショップ」の

データを読みとる！ データを語る！

私たちは、県内各地で「子どもの文化地域コーディネーター」として、芸術の力を用いて、0歳から子どもたちが、地域で伸び伸びと感性豊かに成長できるための活動を興し、世代や業種を超えた関係づくりをしながら、たくさんのお子さんたちも私たちの笑顔に出会うことを目指しています。この6年間の「舞台鑑賞・芸術体験ワークショップ活動参加者数」を見える化しました。県内の子ども劇場のネットワークで積み上げた実績です。



6年間のデータ

(2017年度下半期～2022年度末)

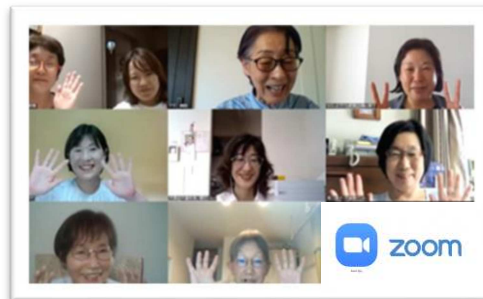
企画数合計：997

(舞台鑑賞 263 体験ワークショップ 734)

参加者数：延べ 73,531 人

(子ども 39,361 人 大人 34,170 人)

※コロナ禍で、2020年度の参加者数は2019年度比で66%に減った。2021年度の参加者数は、2019年度比で88%まで持ち直した。できるだけ予定どおり実施したい、そのために三密を避けて参加者数を増やさない、また企画を次年度に延期して実施という実態です。



語り手は、上段左から小澤孝江さん、2人おいて、横山智子さん、栢まゆみさん、大塚るいさん、滝口淳子さん、中村雪江さん、長谷川詠香さん
(進行：岡田泰子さん、上段右から2人目)

2019年度末からの新型コロナ禍で、感染防止対策のガイドラインをつくり、できることを見つけてがんばった！ 特に周年事業等でふんばった5団体に語ってもらった。

ならしの子ども劇場創立40周年記念公演
人形劇「オズのまほうつかい」2021/8/21 494人

栢：習志野文化ホールを使用することで、多くの子どもたちに観てもらえることを信じて上演を決めた。会員みんなで宣伝活動、協賛金募集に一生懸命動いた。「40周年」をきっかけに、子ども劇場の存在を地域一般に強くアピールできた。ベテラン会員が歴史を掘り起こして記念リーフレットをつくり、子育て中の会員は親子でホワイエを飾って楽しむなど、多くの会員が関わった。「コロナのこういう時期だからこそ生の体験は残していかなければいけない」とがんばれた。

横山：一方で、コロナ禍への不安がある100人近くの人々がキャンセルされたが、感染対策などを工夫し、みんなで最後までやりきることができた。

千葉中央おやこ劇場誕生50周年記念公演
舞台劇「森は生きている」2021/12/12 642人

大塚：「あの作品を観たい！たくさんの人に観せたい！」の3世代の会員からの声に、上演を覚悟をもって決めた。コロナ禍が始まり、動きにくい状況の中、役員を増員して、千葉市内の小学校全部にちらしで案内する、外からの資金調達のために、助成先を探し手分けして申請するなど、思いつくことはすべてやったと思う。今振り返ると、ひとりひとりにちからがついたな、と思う。市内中からチケットの反応があると、「待ってもらえていたんだ！こういうことは必要なんだ」という喜びと自信につながった。「こんな舞台は観たこともがない！」という感動が広がった。

流山北部子育てネット

ミュージカル「すてきな三人ぐみ」2022/6/25 202人

小澤：流山市は「母になるなら流山」として子育て世代が増え、1,000人を超える小学校が3校もあるなど、おおたかの森、南流山地域には施設もどんどんできています。

一方、北部地域は高齢化して子どもが全然増えない、取り残された地域で、子育て支援に関わる大人たちが「何とかしなければ」と手を組み、ながれやま北部子育てネットが発足した。

その記念に「すてきな三にんぐみ」に取り組んだ。地域の方たちから30万円近い寄付金が集まり、子ども食堂、読み聞かせの会ボランティア29人、流山北高の生徒さん18人が支え、172人の地域の子どもたちがワンコインで舞台をみることができた。高校生が小学生を座席案内し、搬出の時には「舞台はこんなになっていたんだ！」と目とキラキラさせていた。

■子ども劇場千葉県センター WAM助成事業■

「0～2歳児と親の笑顔・支援力を豊かに推進するネットワーク事業」2020年～2022年 57カ所 延べ2,008人

滝口：重きをおいたのは、行政等との連携で共につくること。しかし始めたとたんコロナ禍になり、支援施設では活動も中止や縮小となり、外部の人を入れないという状況になった。しかし出向いて「今なぜこの事業をやりたいか、必要と考えるのか」伝えていったところ、「今自分たちもいちばん必要としているところである」とニーズが高いことも見えた。0,1,2歳のうちに愛着形成をすることが大事であること、またコロナ禍での出産や子育てが孤立化している保護者にも心をくわいておられた。人数を制限しての実施から始まったが、親の満足度が高く、親子も安心、施設の人も安心！という中で、プロによる芸術プログラムを届ける事業が大きく花開いたのだと思う。

■子ども劇場千葉県センター文化庁委託事業 「文化芸術による子供育成推進事業」～芸術家派遣事業～■

2017年～2022年 595校、延べ25,623人 芸術家1,503人、コーディネーター227人

中村：「芸術家の体験ワークショップは、勝ち負けはない、点はつかない、となりの子と比べることもない、自由に表現してほしい」と特性と願いを伝え、学校と打ち合わせをしている。日本では表現活動がまだまだ授業の中ではやられていないが、体験した学校の先生は高く評価してくださっている。こういう芸術家の授業を取り入れることで、どんなに子どもが豊かになるか、継続することが大切な課題であり、県内の学校に広がることを願っている。

■子ども劇場千葉県センター 子どもゆめ基金助成事業■

「病院や児童福祉施設の子どもたち対象のワークショップ」2017年～2022年 231回 9,786人

中村：傷ついた子どもたち、治療のために制限があり、たいくつしている子どもたちの表情が芸術のちからで笑顔がいっぱい変わっていく時、ニーズや状況に沿った体験になっているだろうか、といった緊張感から、一気にコーディネーター冥利に尽きるような気持ちに変わってくる。

★「自由記述欄」の書き込み（154件）の声から★

○舞台の感想・ようす

・舞台と観客がいつの間にか一体となった劇空間で、子どもたちの目がキラキラしていた・アーティストの繊細な動きや表情で次は何がおこるかワクワクし、怖いシーンにハッと息のみ引き込まれた・ありのままの自分でいい、いろいろな人を認め合うと感じられる作品だった・教えてもらい「できた！」が増えると笑顔が会場中にひろがった・平和、環境、世界の子どもへのメッセージが心にズシンときた・バックステージ見学に入り込んで興味しんしんだった

千葉北おやこみる・あそぶ会 20周年鑑賞会

コンサート「ピアノカの魔術師」2022/10/30 415人

長谷川：会の名称を「千葉北おやこみる・あそぶ会」に変更して20年目の記念公演に、教育会館大ホールいっぱい観客を迎えることができた。当日、会場はバルーン隊作成のバルーンアート看板やピアノカの折り紙で「ステージを観る前からワクワクした」雰囲気を作った。千葉市だけでなく、県外からも参加者を迎え、演奏に合わせて踊ったパブリカダンスで会場みんなの心がひとつになった。「コロナ禍で本物に触れる機会が少ない。なんの気なしに観ていたものが、将来の夢につながるかもしれない」「音楽って楽しいな。心の底から思った」との感想に、文化芸術の力をみんなと共有できた思いです。そして、会員みんなが知恵を出し取り組んだことが、最後の記念行事「千葉北わくわくフェスタ」に300人を超える参加者につながり、大成功の力となった。

○地域にひろげるとりくみ

・市内全小学校にチラシを配布し多くの小学生の親子が参加・勢いのある地域の落語家さんが演者で、地元市民団体と連携し、祖父母と三世代で楽しんだ・市との協働事業で久々の大きい作品で、市長さん、行政職員も一緒に鑑賞・準備段階から多くの会員が参加することにより、地域に広がった。

○コロナ禍のこと

・会場変更、日程変更など二転三転・感染予防のため2ステージに増やして実施・やっと観ることができ「息が吸えた気持ち」・落語で、笑う場面は拍手で応援した・久しぶりに会った子どもたちはすぐ密になってしまいハラハラした・ギュッと固まってみられない分、演者がたくさん声かけをし会場が一体になった・初めて栈敷席で観るレイアウトをした

子どもが豊かに育つ社会のための緊急政策提言 ～遊びのマニフェストを学ぼう～

遊びのマニフェスト(緊急政策提言)は、子どもが遊ぶ環境を社会がよりよくしていくために TOKYO PLAY によって作られました。遊ぶことは、自分で自分を育てていく「いのちのしくみ」で、すべての子どもに保障されることが必要です。子どもと遊びについての理解を深め、活動にいかしていきましょう。〈一般社団法人 TOKYO PLAY2023. 3. 24 発行〉

〈6月8日(火) 総会関連企画講演会より抜粋 講師：神林俊一さん TOKYO PLAY メンバー コーディネーター〉

■データでみる日本の子どもの現状 〈ユニセフ イノチェンティ研究所が実施した OECD38 か国の世界的な調査〉

日本の子どもは幸せか

外遊びの機会が子どもの幸福度に直結することが指摘されている。まちづくりの中で子どもが自由に遊ぶ環境を保障する必要がある。



日本の子どもの現状

幸福度	社会的スキルとともに、精神的幸福度が38か国中ワースト2位の結果に。幸福感を得られない子どもが増えている
心の発達	幸福度の結果の通り、不登校、自殺、暴力行為、いじめ精神疾患の増加といった、心のケアやそれを防止する政策を整備することが急務となっている。
身体の発達	子どもロコモティブ・シンドローム(立つ・歩く等運動機能の低下)や視力の低下など、身体発達に変化がみられ、生活環境や教育環境の改革が必要である。
子どもを取り巻く環境	急速に進む少子化、核家族化、共働き家庭の増加傾向など、子どもを取り巻く社会環境が大人の視点で優先され、子どもにやさしくない方向に変化している。

- * 「生活に満足している」と答えた子どもの割合が OECD 加盟国 38 か国の中で最も低い。
- * 自殺率も世界平均より高く、その結果、精神的幸福度が低い。
- * 身体的健康では子どもの死亡率はとて低く、医療と保険制度が充実している。
- * 基礎学力の習熟度はトップ 5 に入るが、対照的に、社会的スキルをはかる「すぐに友達ができる」の項目ではワースト 2。

- * 不登校児童生徒数・・・30年間で3.6倍、25万人
- * 児童生徒の自殺・・・400人を超える。死因のトップ
- * 暴力行為発生率・・・8万件。小学校での件数急増。
- * いじめ・・・9万件。認知件数が急増、低学年化。
- * 子どもの精神疾患・・・28万人。2011年以降急増。
- * 子どもの骨折率推移・・・学校での骨折は30年前の1.5倍。
- * 視力 1.0 未満の推移・・・高校生の7割以上

〈出典：文部科学省 厚生労働省、日本スポーツ振興センター等〉

■あそびの現状。あそびは子どもたちにとってはもはや主食とは言えない。主食からデザートになっている。

★空間・時間・仲間が子どもの世界からなくなってきた
今、子どもが遊びを自ら作るのは厳しい現状がある。遊びの現状は、とてつもないところまで来てしまった。自由に遊ぶための環境を整えることを社会でしくみ化し、社会インフラとして整備していくことが必要とされている。そこには当事者である子どもを抜きにしては成り立たない。

★さらに大人の手を借りないと遊べない環境
送り迎えが必要だったり、親同士が話し合っ合意しないと遊びにいけないなどもあり、気楽に外遊びをすることは難しい。平日外遊びをしない・ほぼ家の中で過ごす子が78%、平日に遊ぶ友人の数は0人が18%、5人に一人が遊ぶ友人がいらないという調査結果が出ている。

★「大人がいるからできない遊び」が増えて、子どもからすると大人が多い社会となっている。
子どもが減ると周りに大人が増える。すると子ども同士が触れ合う機会が少なく、いかなる時にも、物心つく時からもうすでに子どもの世界に大人がいる。遊び方の枠があったり遊ばされるのが多くなり、子どもにとっては、遊びの要素が入っているのに、獲得していくことが出来ない。

★すすむ少子化
少子化がますます加速し、子育て世帯の割合がこの30年で半減している。暮らしの中に子どもがいることが当たり前でなくなる。大人が管理する場である生活し、自由に過ごすことよりも、安心安全が優先される場で過ごす子どもが増えている。

少子化で主食からデザートになっている遊び。遊びは子どもたちにとってもはや主食とは言えない。今や遊びは与えられるものになってきている。「○○したら遊んでもいいよ」とご褒美化している。「○○を我慢して○○になったらやってもいい」という、今までとは違う文化となり、昔からあったバランスが変わってきている。

■遊ぶことがなぜ大切か 遊ぶことの意義・効用■

子どもは、大人によって育てられるのとは別に、自ら育つ力を持っている。子どもの内側から生まれる「やりたい」という気持ちは、生きていく原動力となり、そこから子どもは自分の世界を構築し、生きている実感を獲得していく。遊ぶことは、身体や心、人間関係、知性、創造性など、全人的な育ちと、自分の人生を自分で手づくりする土台を築くことにつながる。

遊びの総合的な計画の策定づくりの基本は、子どもと大人と一緒に考えること

何故あそぶことが重要なのか？子どもの育ちに必要なのか？ここから話していくことからがまず一歩です。

子どもの声を聴き、地域の大人の力を結集してつくった TOKYO PLAY による策定経過

実践例

東日本大震災被災地「気仙沼遊びーばー」でのマニフェスト策定への実践

●まず子どもの現状と子どもを取り巻く環境を知り、社会として考えていき、大人が人とつながりを持ち、地域の子どもたちのことを、子どもの声を聴きながらともに考えていく。そのためには人と人、大人も子どもも顔が見えないと始まらないのです。

●何故あそぶことが重要なのか？子どもの育ちに必要なのか？ここから話していくことがまず一歩です。東北の震災の後気仙沼でその土地の家を一軒一軒回り顔を合わせ言葉で伝えていきました。竹藪を借りて子どもたちと何が欲しいか話し、一緒に竹を切り大きな滑り台をつくりました。子どもたちがあほしい、こうしたい、と意見を出し、くみ上げていきました。

●最初は「何しとるん？」と遠巻きにしていた地元の方々も、子どもの邪魔にならないよう、大人の力を發揮し、隠れ手伝いをしてくださり、しめ縄づくりの財政活動まで一緒にしました。一番若い人で66歳、最高齢者は90歳でしたが、みんなでいっしょに、地域で子どもたちと共に遊ぶことの大切さ、楽しさを体験しました。

現状として子どもの遊びに関する施策は、定義や評価の仕組みが曖昧であることもあり、主たる計画の中に組み込まれず、感覚的な記述にとどまり、施策の内容も限定的になることが多い。そのため、子どもの育ちの根幹となる環境を保障する視点から、子どもが遊ぶ環境の整備については、明確なビジョンを定め、戦略に基づいた中長期的な計画を策定する必要がある。〈緊急政策提言の詳細は TOKYO PLAY Webs サイト <https://tokyoplay.jp> 参照〉

Plan1 子どもを取り巻く遊び環境の実態調査

各自治体で子どもに関する新たな計画を策定するには、子どもが遊ぶ環境の実態把握を調査項目に入れる必要がある。そうすることで、子どもが自ら育つ環境が整っているかどうかを把握することができる。

Plan2 遊ぶことの大切さの普及啓発

遊ぶことが、子どもが自らを育む根幹として必要不可欠であること、そして、そのための環境が教育と同様に社会で保障されるようにするためには、遊びの価値を広く一般の人に向けて普及啓発し、寛容な市民意識を醸成することが大きな柱となる。

Plan3 子どもの主体的な育ちに向けた遊び環境の充実

暮らしの中で子どもが主体的に育つ環境を保障するには、家のすぐそばのインフォーマルな空間から、自然の場所や空き地、街区公園、駅前や役所前広場などの公共空間、地域の拠点となる施設まで、子どもの年齢や興味関心に応じて、豊かに遊べる環境の総合的な充実を図ることが欠かせない。

Plan4 子どもの遊びに関わる職務の専門性と社会的地位の確保

現代において子どもが遊び育つことのできる環境を保障するためには、「遊ぶことの価値」「遊びの環境づくり」「子どもとの関わり方」を専門的に理解し、地域に根づく実践ができる人材の必要性が高まっている。

Plan5 子どもの社会参画の推進

子どもは、大人と同じく、社会を構成する主体のある存在である。しかしながら、子どもに関する様々な事柄が、子どもの声が十分に聴かれずに決まっていく現状がある。そのため、子どもを社会の一員ととらえて、子どもの声を聴き、反映する仕組みを行政として構築していくことが必要となっている。

Plan6 自治体内に遊びに関する担当部署・専門員を配置

子どもが育つ環境の根幹として遊ぶ環境の整備を計画に位置づけ、その計画を円滑に遂行するためには、自治体内に担当する部署や担当者を配置し、環境の充実に取り組んでいく必要がある。あわせて子どもが遊ぶ環境の整備に関係する既存の部局や関係する人材においても、子どもの遊びに関する理解が欠かせない。〈文責：滝口〉

令和5年度千葉県赤い羽根共同募金の助成が決まりました！

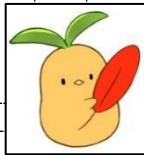


赤い羽根共同募金「テーマ選択募金」では、寄付者の皆さまが様々な地域課題に対し応援したい活動を選んで寄付し、その寄付額が団体への助成額に直接反映されるものです。子ども劇場千葉県センターは、【テーマ②子どもに対する支援、テーマ③子育て支援のための事業】に3事業が選ばれました。頂いた助成金に感謝すると共に、課題解決に向けて取り組んで参ります。

18歳までならだれでもOK
うれしいこともかなしいことも、なんでもはなしていいんだよ！
チャイルドライン千葉
0120-99-7777
通話無料(携帯・スマホもOK) オンライン相談は
まいにち ごこ4時~ごこ9時 こちらから
主催：NPO法人 子ども劇場千葉県センター
後援：千葉県教育委員会 千葉市教育委員会
このカードは赤い羽根共同募金の助成によりつくられています。

「気持ちに寄り添う心の居場所「チャイルドライン千葉」をアドカードとポスターで中学生に知らせる」

- 話を聴いてほしいとの動機が年々増え、令和3年度では81.3%となった。気分の落ち込みが主訴とする話も前年比30%増となった。コロナ禍での学校生活は日常を取り戻したかに見えるが、自殺念慮、希死念慮がうかがわれる話が増え、特に中学生からは死にたい、消えたい、生きる意味が分からない、親に否定された、いじめられている、友人とうまくいかないなどの負の感情に耳を傾けているうち、話せてよかった、気持ちが楽になったと話し終わることも多い。寄り沿って話を聴く心の居場所があることを子どもたち一人一人に知らせていきたい。
- フリーダイヤル(0120-99-7777)番号及びオンラインチャットのQRコードを明示したアドカードとポスターを印刷し配布する。アドカードを県内54市町村教育委員会と千葉県教育委員会を通して県内公立中学校362校の生徒に、フリースクール等の子どもへ3万枚配布。



あなたをひとりにしない・させない! 「ママパパライン」
「ママパパラインちば」
子どもをもつママ・パパ・家庭の子育ての悩みや不安な気持ちを電話でお聞きします。なまえ・住所などはおききしません。安心してゆっくりおはなしてください。電話だからこそ何でも言える。気軽にダイヤルを!
043-204-9390
毎週金曜日 10:00~16:00
キャンペーン:2024年2月5日(月)~2月10日(土)
6日間毎日 10:00~16:00

「ママパパラインちば」の情報をアドカードで当事者に届ける」

- 養育者自身の辛さや苦しさ、イライラ、怒りが爆発しそうな自分を訴える声が多く、コロナ禍での長期自粛生活を起因としたトラブルや子どもに関する心配等で、特に母親の心身にじわじわと影響が出ている。昨年271件(一昨年比+71)と開設以来、最多の件数だった。
- 足掛け3年のコロナによる自粛生活で、これまでも増して虐待・相談件数が増加している。養育者を受け止める・寄り添う等、社会全体で支援することが緊急の課題だと認識している。
- 県内の当事者に「ママパパラインちば」(電話番号/043-204-9390)の情報が届くよう、アドカードを印刷し配布する。
- 配布は54市町村子育て支援課を通じて乳幼児保護者へ。教育委員会を通じて小学生の保護者に配布する。

「0.1.2.3歳が会うはじめてのおしばい」

- 乳児院で暮らす乳幼児に対しプロの芸術家によるワークショップを行い、多様で豊かなあそびや文化にふれる機会をつくり、環境による体験の格差がない環境づくりに寄与する。
- 豊かに生きていくための非認知脳力の形成や成長発達を促す機会とし、施設での遊びの豊かさに寄与する。
- 県内3か所の乳児院へ施設の費用負担がないように届ける。
- 乳児院の子どもたちの生活を支えている保育士やスタッフが乳幼児と一緒に楽しみ、日常の遊び、コミュニケーションツールの拡大の参考にしてもらおう。



編集後記：巻頭を飾った「こども家庭庁」「子ども基本法」スタートの年に、私たち大人が、子どもを真ん中にした社会をつかっていくために、具体的に何をを目指すのか、また、本当の子どもの権利を考えての動きにしていくためには、どうしたらいいのか、私たちの意識が大切ですね。そのための地域や団体で学びの機会を持ち、理解を深めていきたいですね。